

# 経験から生まれる助け合いの気持ち

震災を経験し、私たちの防災に対する意識は変わってきました。大きな災害を経験したからこそ、自分の命を守るだけでなく、人を思いやる気持ちや絆、地域で助け合う取り組みが進んでいます。

災害から身を守るためには、自分や家族の命は自ら守る「自助」、互いに助け合って地域を守る「共助」、消防や警察、市などが救護や支援、防災対策する「公助」の三つがあります。

特に自助、共助による力は大きく、平成7年に発生した阪神淡路大震災では、生き埋めや閉じ込められた人のうち、自助と共助の力で救われた割合が、約97・5%を占めていました。東日本大震災で

も、助け合う行動が多くの命を救いました。避難生活などでは、励まし合う活動から、人と人との絆も生まれました。

災害が発生したときだけでなく、日頃から自助・共助の取り組みを続けていくことが、将来起こり得る災害で被害を減らし、悲しい思いをする人を少なくすることに繋がります。

自助や共助の意識を高め、災害に強いまちづくりをしていきましょう。



## 自助から共助へ



旭市民生委員児童委員  
鈴木志敏さん(中央地区会長)

かしたら、避難を呼び掛けていて命を落とされたのではないかと考えてしまいます。

中央地区の民生委員は、防災への関心が高いことから、市が行っている出前講座で防災について学びました。印象に残っているのは、自助・共助・公助の精神です。私たち民生委員が自分の命を守る備えをしっかりと行っていないければ、周りの人を助けることもできません。

10年前は小学校の校長として、豊畑小に勤務していました。東日本大震災の地震発生時、小学校にも津波が到達するのではと考え、児童を校舎の高い場所に避難させました。3月11日のあの日、夜9時ごろ無事に最後の児童を保護者に引き渡すことができて、ほっとしたのを覚えています。

今は民生委員として、自分が受け持つ地区のお年寄りなどを支える活動をしています。震災のとき、東北地方ではたくさんの方々が亡くなったと聞きました。もし

10年前の震災は、防災について真剣に向き合う貴重な体験となりました。またいつ大きな災害が起きても、児童を無事に保護者に引き渡すことができたように、地域に暮らす1人暮らしの高齢者や、避難が難しい人などを家族に返すことができるよう、民生委員として活動していきたいと思っています。まずは自らの安全を確保するために、しっかりと備えをしておこうと思います。

- ①中谷里地区で進む植林事業
- ②移設した飯岡中が会場となった津波避難訓練
- ③防災訓練での救護活動
- ④防災資料館で市内の児童が震災について学ぶ
- ⑤作った米を被災者に届ける旭農業高校生
- ⑥市民団体が開催した「3.11を継承する集い」



## 社員との絆が会社の原動力に

株式会社 山中食品 山中武夫社長

山中食品は飯岡の海岸に面した米菓製造の工場です。津波による被害を受け、山中社長は悩みながらも震災から2年後に会社を再建し、新たな社員とスタートを切りました。

現在の社員は20人。震災後に社員になった人がほとんどで、津波で被災した人や工場の再建中に声を掛けられ、社長の人柄に触れて入社した人もいます。大変でも前進を続ける社長の下には、たくさんの社員が集まりました。社長は、会社再建までの道のりを「無我夢中の10年でした。仕事もようやく軌道に乗ってきて、社員の生活を守る者として、まだまだ頑張りたい」と話していました。工場を拡張して新しい製品も作りたいたい、今はうれしい悩みも。震災を経験した社長の思いは、会社の敷地に建てられた石碑に刻まれています。



震災の経験から、大規模な停電が発生したときでも地区に発電機があれば、寒さをしのいだり明かりをともしたりして、みんなが助け合えるのではないかと考えていました。

震災後に区長を務める中で、地域で作る自主防災組織について耳にする機会があり、市の補助を受けて、発電機を含む防災資機材の整備を行いました。私の地区にはお年寄りが多く、いざというときに整備した資機材を活用できるかという不安があります。子どもたちにも機材があることを知ってもらい、使えるようになってほしいと思っています。そのためにも地



大崎町区自主防災会  
伊藤徳和さん(大崎町)

区のみんなが集まるときに、使い方の説明や点検を定期的に行っていきたいと思います。万が一災害が発生したときには私たちの地区だけでなく、広く地域で活用していきたいと思っています。

自主防災組織の結成を機に、地域での防災意識が高まってくれることを期待します。

## 地区で高める共助の力